様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００３７８

研究課題名（和文）20世紀中国における新詩の公共性に関する研究

研究課題名（英文）Research on the publicness of Chinese New Poetry in the 20th century

研究代表者
佐藤　普美子（Sato, Fumiko）

駒澤大学・総合教育研究部・教授

研究者番号：６０１１９４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：中国の口語自由詩「新詩」は20世紀初頭の思想解放運動の中で誕生した。本研究は主として1920年代から40年代の中国に生きる詩人の複雑な感覚や情緒を表現した作品に注目し、それらに見える個人と共同体の葛藤、審美意識と倫理感覚について考察を行った。これによって、新詩は西洋のモダニズム詩や詩学の啓発を受けて、中国語や中国文学を相対化する機会を得たこと、さらに伝統的中国古典の再読が詩的言語の発見と創造を促し、新詩の公共性を探求する手がかりを提供したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国古典詩が「漢詩」として広く一般に認知され、一定量の紹介や研究の蓄積があるのとは対照的に、20世紀中国新詩の翻訳や紹介はごく少数で、一般にはほとんど知られていない。本研究は、新詩が新しい抒情のスタイルを持つだけではなく、審美意識や倫理的思考に作用する批評性と公共性を備えることを明らかにした点に学術的意義がある。また、本研究の成果である雑誌や図書の刊行によって、20世紀中国社会に生きた人々の思考や感情について、詩のことばを通して理解する機会を一般の読者に提供したことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Chinese colloquial free verse “New Poetry” was born during the ideological liberation movement in the early 20th century. This study focuses mainly on the works of poets who express the complex feelings and emotions of living in China from the 1920s to the 1940s, and considers the conflicts between individuals and communities, as well as aesthetic and ethical sensibilities that appear in them. This made it clear that New Poetry received the enlightenment of Western modernist poetry and poetics, and therefore had the opportunity to relativize Chinese language and literature. Furthermore, this study pointed out that the rereading of traditional Chinese classics encouraged the discovery and creation of poetic languages and provided a clue to explore the publicness of New Poetry.

研究分野：中国現代文学　特に現代詩

キーワード：中国新詩　公共性　倫理感覚　美感　女性詩歌　台湾現代詩　馮至

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)20 世紀中国文学史に本格的な新詩史が誕生したのは 1990 年代以降のことで、その多くは代表的な詩人や流派を中心として、動乱の時代と関連させながら新詩百年の歩みを概観したものである。その中にあって、1950 年代以降の台湾新詩を初めて考察の対象に含めた洪子誠『中国当代新詩史』（1993）は中国語圏新詩史として画期的著作であった。今世紀に入ると、新詩史を単なる文学流派の興亡や社会運動として捉えるのではなく、テクストの中心的イメージや古典詩歌との関係を視野に入れた文学的アプローチを通して新詩を系譜づける試みが現れ、新詩研究は急速に多元化し、活性化したと言える。中でも王光明主編『中国詩歌通史：現代巻』(2012）は清末知識人の外国詩歌の翻訳から説き起こし、「時代を憂慮する創作」「新しい抒情の探索」など新たな視角を据え、従来の政治的抒情詩とロマン派やモダニズム系芸術詩を対立させる硬直した観点を解消している。また姜濤『公寓裏的塔：1920 年代中国的文学与青年』（2015）は青年の共同体と社会運動・文学運動に関わる諸資料を駆使し、民国期の「文学青年」を生成する政治と文学の磁場を考察することで、従来の新詩研究には欠けていた社会学的アプローチの有効性を明らかにし、新詩が文学研究にとどまらない超域的文化研究の対象となることを示唆した。

(2)上記のように、中国語圏における新詩研究は多元化し、深化しているのに対して、日本では戦後の 50 年代、60 年代を除くと、翻訳による紹介でさえわずかである。その中で秋吉久紀夫氏、岩佐昌暲氏、是永駿氏など一部の研究者により精力的に作品の翻訳紹介と概説的研究が行われてきた。特に 1980 年代になって詩壇に登場した「朦朧詩」については翻訳や紹介が積極的になされ、一般的関心も引くことができたが、その論考の多くは文革終息後の一種の社会現象とみなし、20 世紀民国期の新詩とは断絶した文学現象として扱うものであった。このように日本では、20 世紀前半の新詩について、中国新詩百年の水脈を探るような研究はこれまでなく、文学の「公共性」という視点から体系づける総合的研究はまだ行われていないのが現状である。

２．研究の目的

(1)20 世紀初頭の中国における新詩（口語自由詩）の提唱は五四新文化運動の先駆けとして、圧倒的質量を誇る旧詩（文語定型詩）のもろもろの束縛と文化的重圧からの脱却をめざした一種の思想解放運動であった。旧詩からの脱却と新詩の創造のための文学的資源となり、啓発を与えたのは外国詩歌や西洋詩学そして西洋美学である。本研究ではまずそれらと新詩の影響関係を明らかにした上で、具体的テクストの考察を通して、新詩人たちが意識していた中国社会の現実と時代的要請とは何であったか、また個人と共同体の新しい審美意識や倫理感覚はどのように表現されているかに考察を加えた。考察の対象としたのは主に北京大学などを拠点としたいわゆる京派文学者であり、彼らの今なお鑑賞にたえうる普遍性のあるテクストを選んでいる。本研究の成果はシンポジウムや学会誌に発表するだけではなく、広く一般の人々の目に触れるように単行本で出版した。図書の中の翻訳紹介された新詩を通して、中国文学を専門としない一般の人でも、20 世紀中国文学者が抱えていた社会的課題と創作に込められている彼らの感情や感覚を理解できるように伝えることを目的とした。

(2)20 世紀以降の新詩の公共性を考えるにあたっては、ジェンダー意識を基盤とする中国語圏の女性詩の紹介が有効だと考えられる。今世紀中国の女性詩を牽引する周瓚（1968～）や台湾女性詩人江文瑜（1961～）と陳育虹（1952～）の作品の翻訳を一般雑誌に掲載し、国を超えて女性詩人が共有する意識や感覚を一般の読者にも理解してもらえる機会を提供する。

(3)当初は、新詩の文字テクストだけではなく、詩集や詩歌雑誌の表紙や装丁等、詩集の広告、推薦文等とあわせて、詩の作者や読者の審美意識とその変遷について考察し、論文に発表する予定だった。しかし、この目的は諸条件が整わなかったため、研究期間内に達成できなかった。

３．研究の方法

(1)テクスト分析：各種文学史・アンソロジーの比較対照を通してこの百年の代表的詩人とその代表作をリストアップする。詩人の選択に関しては、現在の新詩研究を牽引する国外研究協力者である北京大学中文系姜濤教授、中央民族大学文学院冷霜教授の両氏に協力を仰ぎ、難解な作品については随時彼らとメール等で意見交換を行い、解読のための助言と意見をいただいた。

(2)研究会詩誌『九葉読詩会』を年 1 回刊行：20 世紀以降の中国新詩だけではなく、旧体詩、西欧現代詩、台湾詩、日中詩の翻訳などについて、同人たちで誌上にて意見交換を行った。また、同分野に関心のある研究者百名あまりに同誌を寄贈し、所載論文について広く感想や意見を求め、有益な助言や感想を得られた。

(3)現地機関での調査・同時代詩人のインタビュー：研究期間はほぼコロナ禍下にあたり、中国大陸および英国ケンブリッジなど海外出張による関係機関の調査は断念せざるを得なかった。特に当初は新設(2018 年 10 月)の四川大学中国詩歌研究院「劉福春中国新詩文献館」における単行本詩集、新詩関係の雑誌等資料の閲覧・調査によって、本文テクストだけではなく、詩集の表紙・装丁等の意匠を確認し、審美意識の変遷という観点からも考察する予定だったが、それを実現できなかったことは悔やまれる。しかし、最終年度（2023 年 8 月）は、台湾の台北市にて詩

人陳育虹に直接インタビューを行った。また花蓮市では東華大学文学院楊牧中心（センター）の図書室や研究室を訪れ、華文系教員と交流した。楊牧は台湾を代表する詩人であり、陳育虹の師にもあたるため、楊牧関係の資料を収集調査することができたのは大きな収穫である。

４．研究成果

(1)中国新詩研究の単著出版：民国期に北京大学を拠点として活動したいわゆる京派とよばれる文学者の中で、何らかの主義や創作理論を標榜することのなかった馮至と卞之琳という二人の詩人をクローズアップし、彼らの新詩や散文に見える言語の特色と思考の方法を考察した。それによって、民国期の知識人の中には中国の社会的現実と時代的要請を常に意識しながら、西洋の外国詩や西洋詩学と同時に中国古典を文学的および思想的資源として、個人と共同体の倫理や人生の諸相についての哲学的考察を深めた詩人が少数ながら存在したこと、それは民国期のロマン主義的抒情詩や共和国期のプロパガンダ性の強い政治抒情詩とは異なり、新詩百年の貴重な水脈の一つとなっていることを指摘した。従来の新詩研究では文学史的意義を重視し、ある流派を形成した代表的詩人の創作や詩学理論にフォーカスすることが多かったが、本研究では二人の詩人の個性と普遍性に注目し、彼らの戦時下（1942 年）の詩集『十四行集』（馮至）と『十年詩草』（卞之琳）を中心に考察したことが、新詩への特色あるアプローチとなった。上記の考察は本研究の成果をまとめた図書『美感と倫理―中国新詩研究』（汲古書院、2024 年 2 月）の前半部に整理されている。美感と倫理という哲学的観点からの考察は、従来の内外における新詩研究にはなかったものとして一定の評価を得た。

(2)新詩評論の系譜の整理：朱自清『新詩雑話』、李広田『詩的芸術』、袁可嘉『論新詩現代化』は 20 世紀 40 年代の新詩評論を代表するものであり、詩の読解における作者と読者の相互作用を視野に入れた点で画期的であった。これらの評論は従来ばらばらに論じられることが多かったが、いずれものちの「解詩学」とよばれる新詩批評の基盤となっていることを本研究では指摘している。また朱光潜の 30 年代の美学的著作『悲劇心理学』『文芸心理学』は、詩歌鑑賞が美的体験によって既成概念の突破を可能にすることを指摘しており、これによって新詩の潜在能力とその存在意義を間接的に補強する論拠になったことを明らかにした。従来の研究では、美学（哲学）的知見を文学研究に関連させることはほとんどなかったが、本研究ではそれを試みた。考察は本研究の成果をまとめた著書『美感と倫理―中国新詩研究』（前出）第 3 章に整理されている。

(3)女性詩の翻訳紹介：本研究の開始前から 1980 年代半ば以降の中国詩壇に登場する「女性詩」の代表的詩人翟永明についての翻訳と紹介は行っており、『灯火 2018』（外文出版社、2019 年）では翟永明に次ぐ第二世代女性詩人周瓚の詩 5 首を翻訳紹介し、その底流にあるユーモアとアイロニーを指摘した。2021 年には台湾女性詩人江文瑜の翻訳詩集『仏陀は猫の瞳にバラを植える』（池上貞子・佐藤普美子共訳、思潮社、2021 年 1 月、総 253 頁）を出版し、フェミニズムと言葉遊びを融合させた新しいタイプの台湾女性詩を紹介した。台湾詩人陳育虹についてはすでに翻訳詩集『あなたに告げた　陳育虹詩集』（思潮社、2011 年）を出版したが、本研究期間には、彼女の近作についての論文 2 篇を学会誌等に発表した。陳育虹は 2022 年秋に東アジアの詩人に贈られるスウェーデンの文学賞シカダ賞を受賞し、その単行本『霞光及其他』は台湾文化部の出版助成金を得て、2025 年 1 月に思潮社から佐藤普美子の翻訳で出版される予定である。

(4)詩歌研究誌『九葉読詩会』の刊行：研究期間内に同誌の第 5 号（2020 年）、第 6 号（2021 年）、第 7 号（2022 年）、第 8 号（2023 年）、第 9 号（2024 年）の計 5 冊を刊行した。なお第 5 号は２010 年以来停刊していた同誌の復刊号である。年 1 回刊行する同誌には「九葉読詩会」同人 8 名の他、各号で日本と中国の研究者に寄稿を依頼した。内容は現代旧体詩の評釈をはじめ、現代詩に関わる論考やエッセイ、翻訳など多岐にわたるが、基本的にすべて詩や言葉にかかわるものである。同誌は現代文学研究者に寄贈し、各人の文章について感想や意見、質問などをいただく機会を提供した。また同誌に執筆した拙論は最終年度に出版した『美感と倫理―中国新詩研究』の基礎となっている。

(5)近隣地域住民向けの外国詩 5 か国語朗読会における新詩の紹介：駒澤大学国際センター主催「地域グローバル化推進講座・外国語詩を読む」の第 1 回（2023 年 1 月 27 日）では同時代詩人西川の詩「ハルカイで星空を仰ぎ見る」を朗読し、第 2 回（2024 年 1 月 26 日）では台湾詩人陳育虹の詩「傾く」を朗読して簡単な解説を行った。講座終了後のアンケートには「中国詩といえば「漢詩」しか知らなかったが、現代詩があるのに驚いた」との反応もあり、中国語の響きや詩の内容に興味を持ってもらう機会を提供できた。書籍の出版による一般社会への発信も大切だが、こうした身近なところから、中国詩の響きを直に伝えていくことも有効であると感じた。

(6)詩集の現物を見ることを目的とした海外調査を実現できず、その方面での成果は出せなった：2018 年に創設された四川大学中国詩歌研究院は詩集 2 万数種、新詩関連文献 10 万余件を所蔵する新詩研究の新たな拠点となっている。特に「劉福春中国新詩文献館」所蔵の豊富な文献資料は本研究の目的の一つである詩集の表紙や装丁を通して審美意識の変遷を考察するための基礎資料とする予定だったが、研究期間の大半はコロナ禍下にあったため渡航の見込みが立たず、同研究院を訪問して調査する機会を持てなかった。残念であるが、今後も機会を見つけ、この方面での調査を継続する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 佐藤普美子	４．巻 9
２．論文標題 馮至とヘルダーリン	５．発行年 2024年
３．雑誌名 九葉読詩会	６．最初と最後の頁 177-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤普美子	４．巻 第17号
２．論文標題 孤単与溝通ーー重読馮至《十四行集》	５．発行年 2023年
３．雑誌名 駒澤大学総合教育研究部紀要	６．最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤普美子	４．巻 第8号
２．論文標題 陳育虹の近作を楽しむ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九葉読詩会	６．最初と最後の頁 172-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤普美子	４．巻 第35号
２．論文標題 華語文学が開く感情史への扉―― 張松建『華語文学十五家』（2020）を読む	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本中国当代文学研究会	６．最初と最後の頁 56-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 第7号
2．論文標題 戦士の懐にしまわれた小さな写真入れ――卞之琳「慰労信集」（初版）第十八首をめぐって	5．発行年 2022年
3．雑誌名 九葉読詩会	6．最初と最後の頁 142-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 冷霜著　佐藤普美子訳・解題	4．巻 第7号
2．論文標題 「ポスト革命」の文脈と当代詩歌研究の「断裂」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 九葉読詩会	6．最初と最後の頁 168-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 第72集
2．論文標題 馮至の「異郷」――散文集『山水』を中心に	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『日本中國學會報』	6．最初と最後の頁 134-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 第40号
2．論文標題 陳育虹が奏でる<交ぜ織り>の響き――サッフォー、李清照への応答――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 お茶の水女子大学中国文学会報	6．最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 第６号
2．論文標題 緑蜂と蟋蟀――梁秉鈞の詩から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 九葉読詩会	6．最初と最後の頁 173-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 第63巻第11号
2．論文標題 中国の詩人は今何をかくのか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代詩手帖　11月号	6．最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤普美子	4．巻 14
2．論文標題 民国時期新詩理論中的倫理性価値観念――以“同感”与“経験”為主	5．発行年 2020年
3．雑誌名 駒澤大学総合教育研究部紀要	6．最初と最後の頁 103‐113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 佐藤普美子
2．発表標題 二つの伝統と新詩の力
3．学会等名 中国社会文化学会　2023年度大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤普美子
２．発表標題 従謝冕先生的一篇紀念馮至的文章談起　（動画による参加報告）
３．学会等名 謝冕学術思想至中国新詩研究国際研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤普美子
２．発表標題 臧克家：1930年代の作品を読む
３．学会等名 1930年代文学研究会11月例会（11月18日）
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤普美子
２．発表標題 抒情の形式――卞之琳はどう読まれてきたか
３．学会等名 日本中国当代文学研究会12月例会（12月18日）
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤普美子
２．発表標題 “経験”与“同感”――民国時期詩学的倫理性価値取向
３．学会等名 『中国新詩総論』学術研討会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤普美子
２．発表標題 民国時期新詩理論中的倫理性価値観念――以“同感”与“経験”為主
３．学会等名 “五四文学文化再思考”国際学術研究会（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 佐藤普美子	４．発行年 2024年
２．出版社 汲古書院	５．総ページ数 232
３．書名 美感と倫理――中国新詩研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関